

グローバル化のもとでの金融業の国際展開と欧米メガバンク

広島修道大学 川本 明人

1990年代以降、グローバル化の進展のもとで金融業のグローバル展開も大きく進んだ。とりわけ21世紀型とよばれる国際金融危機が発生した90年代半ば以降、金融セクターの直接投資あるいは金融機関のクロスボーダーM&Aが顕著になった。本報告では、国際金融業の変遷を振り返りながら、多国籍銀行論として展開されてきた理論もふまえて、今日の金融グローバル化下における金融業の国際展開の大枠をつかむことを目的とする。国際資金取引を担う金融機関としては、銀行のほか、証券会社や保険会社、機関投資家、ヘッジファンドなどさまざまであるが、主に銀行に焦点を当てて議論を進める。

銀行の国際化あるいは海外進出に関しては、これまで多国籍銀行論として研究蓄積がある。これらには、多国籍企業論ないし直接投資論の銀行部門への適用、海外進出先にまで継承される国内顧客企業－銀行関係からの説明、あるいは規制回避を意図したユーロ市場やオフショア市場への進出説明などが代表的なものとしてある。また、多国籍銀行の活動パターンとしては、Grubelの次の3つの分類がよく知られてきた。1)多国籍リテール業 銀行がもつ経営技術やマーケティング・ノウハウなどを海外で優位に活用する活動、2)多国籍金融サービス業 海外進出した国内顧客企業のサービス需要に応えるもの、3)多国籍ホールセール業 ユーログラマー取引に代表されるような大規模な国際資本取引を行うもの。多国籍銀行の歴史的な発展過程を鳥瞰すれば、初期段階は、国内顧客に追随して海外に進出し(Follower)、金融サービスを提供するという2)の形態が多く、次いでユーロ市場や国際金融センターに拠点を設けて活動する3)の形態が増えた。そして今日、金融グローバル化の中で多国籍銀行の巨大化・多様化とともに、進出国でのリテール業務に積極的に関わっていくという1)の形態が目立つようになってきた。この点は、今日の多国籍銀行論研究の重要な課題の一つであると思われる。とくに中南米やアジアなど、エマージング市場経済を中心に、現地通貨による預金 貸付として完結する金融サービスを展開する形で多国籍銀行の海外活動＝グローバル・バンキングが展開されている。

一方、主要多国籍銀行は、M&A やアライアンスを繰り返しながらメガバンクとして大規模化している。アメリカでは3大銀行体制がM&Aの進行で形成され、EUでは大型クロスボーダーM&Aも開始されている。また業務においても証券業務や保険業務などを取り込んで、金融コングロマリットとして突き進んでいるものもある。証券化のなかで投資銀行や資産運用業、機関投資家等と競争するために、多様な金融サービスを展開しているのである。こうした欧米メガバンクの業務多角化の実態や収益構造もみながら、金融業国際化の今日的姿を多国籍銀行の新たな展開としてまとめていきたい。